社会科 NAVI+ ナビプラス

小学社会

令和６年度版
『小学社会』の
解説つき!

子どもを中心とした問題解決学習の実際

「子どもの素朴な疑問を大切にする問題解決学習」
名古屋大学大学院教授　柴田　好章

「子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業をめざして」
宇都宮大学共同教育学部附属小学校　菊地　麻紀

「わたしたち市民のよりよい未来をつくる問題解決学習」
広島大学大学院准教授　永田　忠道

「子どもたちの視点からの教材研究により、社会構造を可視化できる社会科授業をめざして」
広島大学附属東雲小学校　伊藤　公一

本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の新版教科書情報
詳しくはWebへ!
日文　検索

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。

令和６年（2024年）度版小学校社会科内容解説資料として扱われます。

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

令和６年（2024年）度版教科書『小学社会』が完成しました！

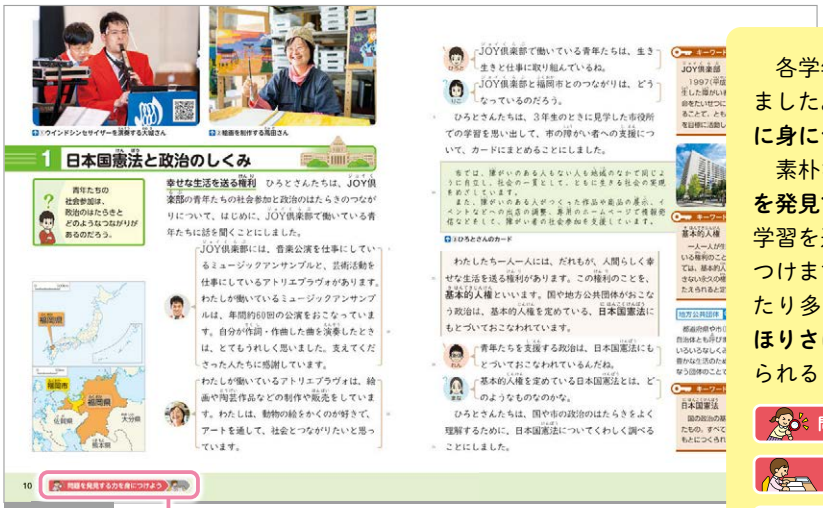
本文を三つの役割に分けました。

役割 1
どのような学習活動（技能を伴う活動）をするのか書かれています。

役割 2
図版と同様に資料的な内容が書かれています。

役割 3
友だちの疑問や発見などといった発言です。思考力・判断力・表現力などを活用した話し合いが展開されています。

6年 P.16-17



6年 P.10-11

各学年の本文ページの下に**インデックス**を設けました。これは、学習を進めるうえで**子どもたちに身につけさせたい力**を示しています。

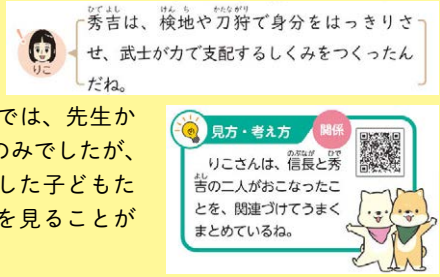
素朴な疑問から学習問題をつくることで「**問題を発見する力**」を、つくった学習問題を追究する学習を通して「**問題を追究・解決する力**」を身につけます。さらに、子どもたちが選択・判断をしたり多角的に考えたりするページでは、「**問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力**」を身につけられるようにしました。

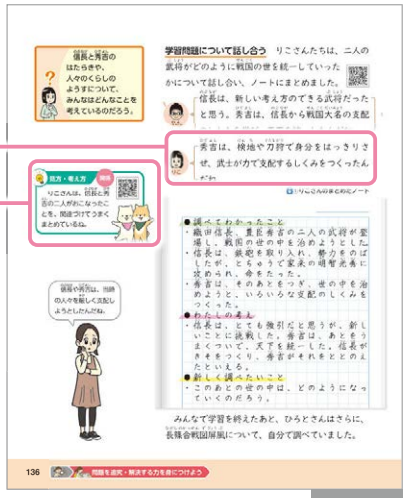
問題を発見する力を身につけよう

問題を追究・解決する力を身につけよう

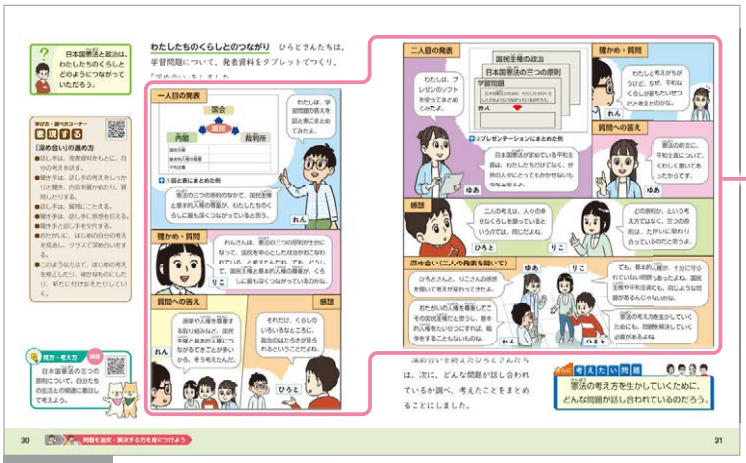
問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけよう

見方・考え方コーナーに、**子どもから生まれた視点や方法**を加えました。これまでは、先生から示される視点と方法のみでしたが、これまでの学習を生かした子どもたちの見方・考え方の姿を見ることができます。





6年 P.136



6年 P.30-31

聞くことを大切にした「**深め合い**」**活動**について、**マンガ**を使ってくわしく紹介しています。一人ひとりの考えを聞き合い、さらに自分の考えが変わるような場面を設定しています。

国語科との関連も意識しています。

子どもの素朴な疑問を大切にする問題解決学習

名古屋大学大学院教授　柴田　好章

子どもの素朴な疑問から出発する社会科授業

社会科問題解決学習においては、子どもが問いをもち、解決に向けて主体的に活動し、学級の仲間とともに協働することが大切です。問題解決学習の出発点は、子どもの素朴な疑問です。写真や資料からの気づきや、日常生活の振り返りから、問いが生まれてきます。

どんな素朴な疑問にも、その子どもの関心や個性が表れています。また生活者としての願いや、社会に対する想いが見え隠れしています。そうした素朴な子どもの声を、教室のなかで教師も子どももお互いに大切にし、わたしの願いとみんなの願いを育てていくことが求められます。それが、小学校社会科の目標である「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」を培うための基盤になります。

図１のように、令和６年度版『小学社会』の紙面においては、学年の導入で、１年間の社会科の学習に見通しをもつために、それぞれの大単元を代表する写真が載っています。この写真のなかから、様々な気づきや疑問が生まれます。

図１の中では、れんさんが、わたしたちの住んでいるところの写真を見て、「同じ市なのに、場所によって土地のようすがちがうみたいだね。」という気づきを発言しています。このように、教科書に登場するキャラクターの発言は、教室で子どもたちが写真や資料から疑問や気づきを得たり、情報を整理して思考したりするためのきっかけとして活用できます。

また、教科書の本文ページには、普段、目にすることの少ない様子を示した写真や、学習に有効な資料など、子どもの気づきや疑問を誘発する魅力的な写真や資料がたくさん掲載されています。

各単元の導入においては、資料や写真、経験の振り返りから、気づきや疑問をできるだけ多く出し合うことが大切です。子ども同士で素朴な疑問をできるだけ多く出し合い、話し合いながら問いを深め「学習問題」にまとめていきます。

素朴な疑問・気づき

↓

意見交流

↓

学習問題

子どもが与えられた課題をこなすのではなく、自らが見通しをもって学べるように、一人ひとりの素朴な疑問から、みんなで追究したい学習問題を構成するのです。

図１　学年の導入（３年表紙 2-P.1）

図２　「店ではたらく人びとの仕事」の教科書紙面

学習問題の形成の具体例

図２は、令和６年度版『小学社会』の３年小単元「店ではたらく人びとの仕事」の導入から学習問題が生成されるまでの４ページを示しています。知っている店を紹介し合うことから学習が出発し、地域にある店の写真や地図を見ながら、それぞれの家の買い物について調べていきます。そして、記入した「買い物カード」をもちより、グラフに整理します。その過程で以下のような発言が展開されていきます。

○「スーパーマーケットが多いみたいだね。」
○「食りょう品は、ほかの店でも売っているのに、スーパーマーケットで買う人が多いのはなぜだろう。」
○「日用品もスーパーマーケットで買う人が多いね。何かお客さんに来てもらうためのひみつがあるのではないかな。」

それぞれがもちよった事実、気づき、疑問を話し合うことにより、「スーパーマーケットに、たくさんのお客さんが買い物に来ているのは、なぜなのだろう。」という「学習問題」がつくられています。

子どもの疑問から深い学びへ

教室での子どもの経験、気づき、疑問をもとに学習問題を形成することに、難しさを感じている先生方も少なくないようです。

○社会科のねらいにせまるような気づきが出てこない。
○素朴な疑問がたくさん出過ぎて、収拾がつかなくなる。
○一人ひとりの思いを大切にしようとすると、みんなで考えたい学習問題に絞りこむことが難しい。

学習問題は、できるだけ多くの子どもの疑問の背後の問題意識を包含するものであるとともに、社会で生きている人々への共感を伴ったものであることが大切です。次のページの菊地麻紀先生の実践報告では、教師の発問や板書を効果的に用いて、子どもそれぞれがもちよった疑問をもとに、みんなで追究する学習問題をつくるプロセスが示されています。子どもたちは、地域の課題を自分ごととして考えるようになり、学びを深めていっています。

わたしの実践報告
学習の進め方
第４学年

子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業をめざして

宇都宮大学共同教育学部附属小学校　菊地　麻紀

１　はじめに

わたしがめざしているのは、「子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業」である。子どもが主体的に自他の問いを追究していく力を育むためには、どんな教材とどのように子どもを出会わせるか考え、生活と学習をつなげて事実をもとに生活経験を生かしながら学べるような場の設定をすることが大切だ。そして、子どもが自律的に学ぶ力をつけるため、自ら疑問をもって考え、子どもの心が動く場をつくれるように授業の展開を考えている。

２　日頃の授業で心がけていること

①子どもが問いをつくれるようになること

まずは、単元の最初に子どもが自分の問いから学習をつくることをめざす。子ども発の問いを学習問題として子どもへ返すことで、子どもが主体的に学習することを習慣化させたい。授業で調べて分かったことや気づいたことをまとめ、振り返りには、自分の意見や、さらに調べたい新たな疑問などの内容的な反省と、自分や友だちの学び方の反省を書くようにすることで、継続的な問題解決学習ができるようにする。

②社会的事象を多面的・多角的に捉えるための支援

単元構造表を作成し、地理的位置や歴史的背景、工夫と努力など、その教材をどんな視点で捉えるかの見方を示し、単元のどの時間で比較・分類・統合・関連などの方法を使って考えるのかを明らかにする。子どもたちの興味をひくような写真や動画と単元の初めに出会わせることで、一人ひとりの様々な気づきや素朴な疑問から追究をするうえで観点となるキーワードを見つけ、単元を貫く学習問題をつくっている。

また、社会的事象を多角的に捉えるために、複数の立場を重視した資料や場の設定として、単元の中のキーパーソンに焦点を当て、様々な立場の人々が協力している事実が捉えられるようにしている。

３　授業の概要

本実践は、栃木県内の伝統や文化についての各種資料から、那須烏山市の人々が460年の歴史ある「山あげ祭」をどのように受け継いできたかを調べるとともに、山あげ祭に込められた人々の願いを考えたり、パンフレットや手紙にまとめたりする単元である。

学習問題を追究する場面では、キーパーソンに焦点を当て、山あげ祭が市内の様々な立場の人々が協力して開催され、伝統が受け継がれているという事実を捉えられるようにした。そして、山あげ祭に関わる若衆・役者・和紙職人・山あげ保存会・協賛会社などの複数の立場の相互関係などを調べるようにした。

社会科見学では、烏山和紙をつくる作業場が明治時代には1000軒もあったのに、現在では１軒しかないこと、山あげ祭にはお金と人材が必要だが、その確保が困難であることなど、「伝統の継承」という現実問題と出会えるようにした。

子どもたちの発言

和紙づくり体験をして、人手が足りないと伝統がなくなってしまうから、伝統の物を買ったり、宣伝したりして、伝統を受け継ぎたいと思いました。

祭りのリーダーのＨさんが、山あげ祭を盛り上げるためのいいアイデアがあれば、ぜひ考えてもらいたいと言っていたよ。いいアイデアはあるかな？

山あげ祭の人手とお金が足りないという問題について、自分も考えてみたいな。わたしは若衆をやってみたいけど、みんなはどう思っているのかな？

学習問題を追究してきた子どもたちは、その現実問題を自分ごととして考え始めた。

4　単元構造表

社会的事象を多面的・多角的に捉えるための支援として、この単元構造表を作成した。一目で、単元の流れや使う資料と、その見方や考え方が分かりやすい。

以下の単元構造表は、単元に入る前に作成するが、子どもの様子や授業の流れに合わせて柔軟に展開を改善していく。

単元名	４年　山あげ祭を受けつぐ人たち（全 11 時間）
単元の目標	各種資料から、那須烏山市の人々が山あげ祭をどのように受け継いできたのか、山あげ祭の歴史的背景や保存、継承のための取り組みに着目して問いを見出して調べるとともに、調べたことをもとに山あげ祭に込められた人々の願いを考えたり、保存、継承のための取り組みと人々の努力や願いを関連づけ、学習したことをパンフレットや手紙にまとめたりできる。

時	問い・めあて	資料	見方	考え方	キーパーソン	子どもの様相	評価
1	栃木県に伝わる伝統や文化財は、どんな願いや思いを込めて受け継がれてきたのか	文化財の写真 県の地図	地域・分布・由来	比較		栃木県内には、たくさんの文化財があって、古くから大事にされてきたのだな。	栃木県内の伝統や文化財を理解している。 【知識・技能】
2	（資料から学習問題をつくろう）「山あげ祭は、どのように受けつがれてきたのか」	山あげ祭の写真・動画 新聞記事	地理的位置・業績	関連づけ	・若衆 ・役者 ・観客	どうやったら伝統ある山あげ祭を受け継いでいけるのかな。	自分たちの問いから学習問題を考え、学習問題の解決に向けた予想や学習計画を立て、見通しをもって調べようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】
3	（予想と学習計画を立てよう）	山あげ祭の写真・動画	働き・願い・努力	分類	・若衆のＨさん ・Ｓさん ・踊り子のＦさん ・Ｗさん	山あげは重くて大変だけど、お客さんを楽しませるために頑張っている。	
4	山あげ祭はどのような祭りで、いつから続いているのか	写真 パンフレット	歴史・時代・起源・由来・背景	統合	・烏山和紙職人のＦさん	世の中の平和や疫病退散を願う460年も続く長い歴史のある祭りなんだ。	山あげ祭の歴史を理解している。 【知識・技能】
5	山あげ祭はどんな人たちによって行われているのか	祭りに関わる人の写真・手紙	役割･仕組み･連携・協力・関わり	関連づけ	・若衆 ・役者 ・山あげ保存会 ・和紙職人	山あげ祭には、たくさんの地域の人が役割分担して、協力しながら関わっている。	多くの地域の人が協力して祭りを支えていることを理解している。 【知識・技能】
6	山あげ祭はだれがどんな思いでやっているのか	祭りに関わる人の写真・手紙	工夫・努力・願い・対策	関連づけ	・市役所観光課 ・保存会 ・山あげ会館 ・スポンサー会社	若衆は伝統を引き継ぐために努力し、那須烏山市全体で祭りを盛り上げようとしている。	山あげ祭に関わる人の努力や願いを理解している。 【知識・技能】
7	コロナ禍のなか、今年の山あげ祭はなぜ開催できたのか	若衆からのメッセージ 開催をとりやめた祭りの新聞記事	計画・維持・継承・発展・影響・協力・願い	関連づけ 比較	・若衆 ・役者 ・和紙職人 ・山あげ保存会 ・山あげ会館	市民の健康を守ることも大切だけど、若衆と市民の強い希望と工夫と努力があって開催できた。	現状を踏まえ、どのように伝統を受け継いでいけばいいのか考えている。 【思考・判断・表現】
8・9	これからどのように伝統を受け継ぐのか～若衆をやるか、やらないか～	若衆代表者のメッセージ 保護者アンケート	持続可能性・願い・自分の関わり方を選択・判断	関連づけ	・自分 ・保護者 ・若衆の代表者	自分も若衆をやりたい。祭りの魅力をPRして知ってもらうことが大切。地域の祭りにも参加したい。	どのように伝統を受け継いでいけばいいのか、自分にできることを考えている。 【思考・判断・表現】
10	パンフレットにまとめて、自分の家族に山あげ祭の魅力を伝えよう	山あげ祭の写真・資料	本時までの全て	統合	・家族	家族に祭りの魅力を伝えて、来年は家族と一緒に祭りに行きたい。祭りの魅力が伝わるパンフレットを書きたい。	山あげ祭の魅力や、祭りに関わる人の思いや願いについてパンフレットにまとめている。 【思考・判断・表現】
11	テスト・山あげ祭に関わるいろいろな立場の方へ手紙を書こう	祭りに関わる人の写真	本時までの全て	統合	・若衆 ・役者 ・和紙職人 ・山あげ保存会 ・山あげ会館	山あげ祭は、昔から多くの人が関わって協力していることが分かった。感染対策をして、参加したい。	学習して考えたことを手紙にまとめている。 【知識・技能】 【思考・判断・表現】 【主体的に学習に取り組む態度】

5　本時の指導案

めあて　「山あげ祭」の資料を見て、学習問題を設定しよう

本時のねらい　写真や動画の資料より、山あげ祭の歴史的背景や保存と継承のための取り組みに着目して問いを見出し、山あげ祭を受け継ぐ人々の努力や願いに対する学習問題と、その予想を考えることができる。

本時の展開（2 ／ 11 時間）

子どもの活動と発言	指導上の留意点
子 子どもの発言　配分時間	
1　山あげ祭の写真と動画を見て、本時のめあてを確認する。　10分	・今年の山あげ祭のニュース動画を見せることで、山あげ祭の様子を知り、関心をもてるようにする。 ・祭りの内容と様子が分かる写真を提示することで、祭りの運営や集客などにも着目できるようにする。
めあて　山あげ祭の資料を見て、学習問題を設定しよう	
2　山あげ祭の写真を見て、気づいたことと疑問をワークシートに書き、発表する。　15分	疑問が書けない子どもには、写真について教師から疑問を投げかけ、まだ事実が明らかではなく分からないことがあることに気づけるようにする。
子 大人も子どももたくさんいて、劇をしている。 子 劇に出ている人は、どんな人たちなのかな。 子 どうやって今まで続いてきたのかな。	
3　疑問から学習問題を設定する。　10分	疑問のなかに含まれているキーワードを観点として明らかにすることで、単元を通して追究していく学習問題の観点を学習計画として位置づけられるようにする。
子 まずは、山あげ祭がどんな祭りなのか知りたい。	
学習問題　山あげ祭は、どのように受けつがれてきたのか	
4　学習問題の予想を考える。　10分	これまでの社会科で学習した立場について問いかけることで、どんな立場の人が山あげ祭に関わっていそうか予想できるようにする。
子 山あげ祭は、市民が幸せを願ってみんなで楽しむ祭りで、昔からたくさんの人が力を合わせて頑張って受け継いできた祭りだと思う。 子 いろいろな方法で宣伝もしていると思う。	※山あげ祭の動画や写真を見て気づいたことや、疑問と設定された学習問題に対する予想について、見通しをもってワークシートに書いている。【主体的に学習に取り組む態度】

本時の成果と次時以降の様子

動画や写真の資料から山あげ祭について気づいたことを話し合う場面では 10 人、疑問を出し合う場面では 14 人の子どもが意欲的に発言していた。その発言を聞いていた他の子どもは「あー、確かに。なるほど。それも気になるね。」などとつぶやいていて、多くの気づきや疑問を共有することができた。

そして、疑問のなかに共通するキーワードを観点として探し出すことで、似ている疑問をつなぐことができた。子どもがこの後の授業で追究活動を自律的に行えたのは、本時で自分の問いをしっかりもち、お互いの問題意識を関わらせて、みんなで追究したい学習問題を設定することができたからだろう。

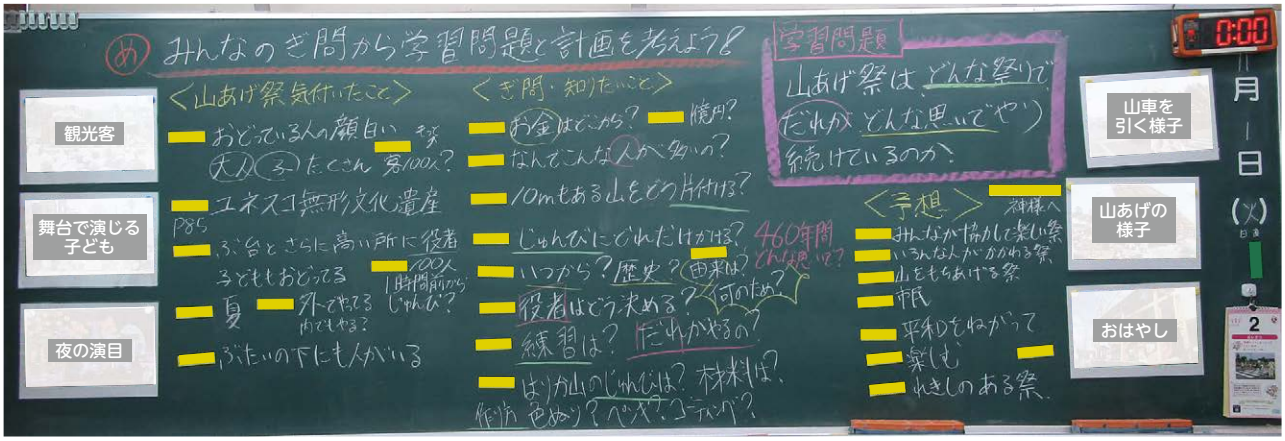
次時の授業や社会科見学では、分からないことから分からないことへ、事実の確認を促す声かけをすることで、気づいたことからまた新たな疑問が出るような学習指導を心がけた。学習問題の追究後には、学習したことをもとに、地域の伝統や文化を保護したり継承したりするために、自分たちが協力できることを考えるような更なる問いをもち、自分の祭りへの関わり方を選択・判断する授業へと展開することができた。

【子どもの素朴な気づきと疑問から学習問題をつくる授業の板書】

発問例

山あげ祭の写真とニュース動画を見て、気づいたことや「おや？なぜだろう？」と気になることはあるかな？

みんなから出た疑問のなかで、つながる観点はあるかな？学習問題の予想を立てて、事実を確かめていこう！



板書のPOINT

だれがどんな意見を言ったのかが分かり、つけたしの発言がつながるようにネーム磁石を活用する。

学習問題を考えるときの観点が分かりやすいように、色別のチョークで下線を引いたり囲んだりする。

子どもの思考の流れや関連が可視化できるように、ワークシートと板書を対応させてまとめる。

授業記録（学習問題をつくる場面）の一部

教 教師の発問・指示・説明　子 子どもの発言

教 山あげ祭の写真や動画からたくさん気になる疑問を出すことができましたね。これから山あげ祭のことを学んでいくけど、学習問題を設定するうえで、友だちの疑問を聞いてつながると思うキーワードを観点として出していきましょう。

子 どんな準備をするのか、どんな練習をするのか、山あげ祭がいったいどんな祭りなのかを、まず知りたい人が多いと思います。

教 なるほど、まずはどんな祭りなのか気になるんだね。

子 役者や観客などの人に注目しているから、だれが祭りをやっているのか調べたいです。（Bさん）

子 B さんにつけたしで、460 年間も続けているなんて、だれが、何のために、どんな思いで祭りをやり続けているのか気になります。

子 それは、歴史や由来にもつながると思います。

教 なるほどね。では、今出てきたキーワードを観点としてまとめると、どんな学習問題になるかな？

子 「山あげ祭はどんな祭りで、だれが、どんな思いでやり続けているのか」、でどうですか？

教 この学習問題でいいかな？みんな納得？では、学習問題に対する自分なりの予想を考えてみましょう。

子どもの素朴な疑問は、一人ひとりの個性が現れ、資料の見方も関心も様々だ。だからこそ、共通点を探して、みんなが共通して追究していく学習問題の観点を位置づけて、焦点化することが大切である。

お互いの意見をよく聞き合える子どもは、個々の意見の関連性に気づくことができるので、つけたしの意見が続く。

子どもの言葉でつむがれた学習問題は、与えられた課題よりも子ども自身が見通しをもって学ぶことができる。見通しをもつためにも、学習問題の予想を立てることは重要であり、さらに自分の予想と事実が合っているのか確かめたい意欲が高まるのである。

わたしたち市民のよりよい未来をつくる問題解決学習

広島大学大学院准教授　永田　忠道

いま学校を取り巻く現実社会は、大きな岐路の只中にあります。これだけ文明や世の中が進歩をとげてきていても、わたしたちは未だに世界的な感染症や戦争を克服することができていません。このような世界と社会から「よりよい未来をつくる」ために、わたしたちは日々の社会科授業において、何をどのように取り組んでいけば良いでしょうか。

令和６年度版の新教科書『小学社会』は、現行教科書でも大事にしている社会科らしい「よりよい未来をつくる」ための問題解決学習をさらに学びやすくする新たな工夫を施しています。その工夫が新たなインデックスと巻頭（**図１**）と巻末（**図２**）です。

インデックスとは検索や見出し、指数や指標のことを指すことが多いようです。新しい『小学社会』では、インデックスを**「問題を発見する力を身につけよう」「問題を追究・解決する力を身につけよう」「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけよう」**の三本の柱や矢のように設定しています。これまでの教科書でも三本の柱や矢のようなインデックス（これまでは３次構造と呼んでいました）に基づいた学習のあり方を教科書上で表してきていましたが、これまで以上に学びやすく分かりやすい工夫をしています。

具体的には、第３学年から第６学年までの全ての教科書の巻頭に**「社会科の学習の進め方」**を設けて、インデックスに即した学習の進め方を解説しています。この巻頭では、「社会科は、問題を見つけ、追究・解決するために調べたり考えたりして、よりよい未来をつくっていこうとする教科」であると明示しています。

そのうえで、第６学年の場合、政治のことを学習する際に、政治の何をどのように学んでいけば良いのかどうか、単元をつらぬく学習問題を丁寧に見出し発見し、つくり上げていくのが最初のインデックス「問題を発見する力を身につけよう」です。学習問題を設定することができたら、次のインデックス「問題を追究・解決する力を身につけよう」へと進み、追究が熱を帯び深化すればするほど、**「さらに考えたい問題」**がわき出してきます。単元によっては、「さらに考えたい問題」は授業のなかでは扱わない場合もありますが、最後のインデックス「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけよう」に関する学習までを学校での授業のなかで、さらには子どもたちの生活のなかでも自然と考え続けていけるようになることを、新し

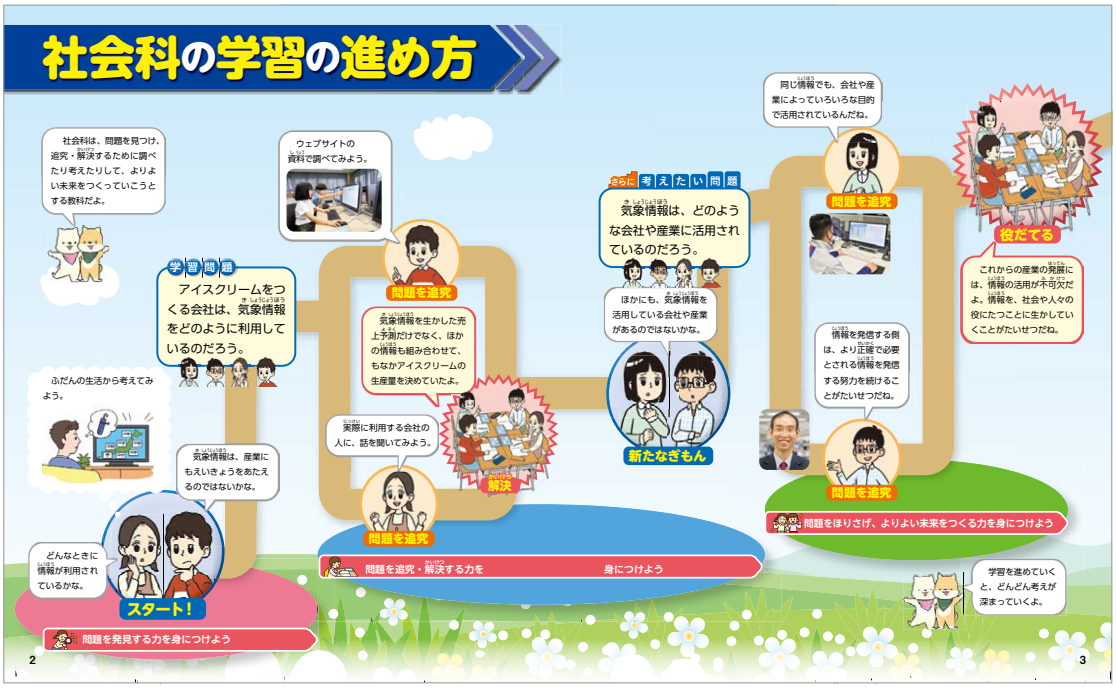


図１　インデックスと巻頭「社会科の学習の進め方」（5年 P.2-3）

図2　巻末「どんな力が身についたのかな」（6年 P.276-277）

い『小学社会』では理想としています。

社会科の学びのインデックスは、巻頭で見通しをもち、その先の単元のなかでも紙面上に分かりやすく明示しています。そして、各学年の巻末の**「どんな力が身についたのかな」**では、インデックスに即した学びの総括的な整理や振り返りができるようにしています。

第３学年から第６学年まで全学年を通して、インデックスに即した学びを見通す巻頭の「社会科の学習の進め方」、学びの総括的な整理と振り返りを可能にする巻末の「どんな力が身についたのかな」により、問題解決学習を大事にする社会科で身につけることが期待される「問題を発見する力」「問題を追究・解決する力」「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力」の三本の柱や矢を着実に確実に意識的に学習できるのが新しい『小学社会』の特徴です。

では、令和６年度版『小学社会』の新たなインデックスと巻頭と巻末について、伊藤公一先生の第６学年の実践「世界のなかの日本とわたしたち～わたしたちのくらす広島とのつながり～」と関連づけながら見てみましょう。この実践ではまず、日本とつながりの深い国々を確認するなかで、学習問題「日本とつながりの深い国々は、どのような国で、人々はどのようにくらしているのだろう」を見出していきます（新版教科書でいうと、インデックス「問題を発見する力を身につけよう」にあたります）。伊藤先生は、広島県の子どもたちにとって身近でもあり世界遺産でもある、原爆ドームや宮島を訪問する世界各国の人々の存在を子どもと改めて確認し合うことから、学習問題の発見へと導いています。

そのうえで次の段階では、アメリカ合衆国、中華人民共和国、ブラジル連邦共和国、大韓民国の人々のくらしの学習を進めていきます（新版教科書でいうと、インデックス「問題を追究・解決する力を身につけよう」にあたります）。本実践ではこの４か国の学習を進めつつ、特に広島県･広島市と姉妹･友好都市になっている「ハワイ州とホノルル市（アメリカ合衆国）」と「四川省と重慶市（中華人民共和国）」への学習の焦点化が図られていくのが本時となっています。日本･アメリカ・中国、そして広島県・広島市、ハワイ州・ホノルル市、四川省・重慶市は、それぞれが戦争と平和を語り振り返るとき、その被害と加害の関係は複雑なのですが、そのなかでも、各自治体が友好都市としての交流を戦後に始め、今後も継続していこうとする姿そのものが、次の段階（新版教科書でいうと、インデックス「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけよう」にあたります）へと自然につながっていきます。

このあとに詳しく見ていただく伊藤先生による本実践は、令和６年度版『小学社会』の新たな学びの考え方と共通している授業モデルの一つとなります。

わたしの実践報告
学習の進め方
第６学年

子どもたちの視点からの教材研究により、社会構造を可視化できる社会科授業をめざして

広島大学附属東雲小学校　伊藤　公一

１　子どもの興味や関心をもとにした教材研究

わたしが日頃の授業づくりや授業実践において心がけていることは、「教材研究」をいかに子どもたちの視点から行うかである。そのなかでも、特に「教材（学習材）選定」にこだわりをもって取り組んでいる。単元の入り口として、子どもたちの日常生活において身近でかつ、その教材を通して背景にある社会構造が見えるものを選定する。そして、子どもたちの課題追究や課題解決の学びのプロセスを予想しながら、その教材を用いた授業づくりをしていくことが、子どもたちにとって興味や関心をもてる授業へとつながるポイントであると考える。

２　授業実践の構想

さて、日本文教出版の令和６年度版『小学社会』では、新たにインデックスが示されているが、わたしが授業をおこなう際にも、同じように単元を三つの段階に分けて子どもが追究を深めていけるよう、心がけている。

具体的には、まず単元の第１次（インデックスでいうと「問題を発見する力を身につけよう」に対応）においては、子どもたちが初めて教材と出会った時に、「分かりたい」「知りたい」という気持ちをもてるようにすることが重要であると考える。そのために、その教材を用いた授業を構想するポイントとして、子どもたちがもっている経験や知識をゆさぶり、これまでもっていた見方・考え方（視点や方法）をくつがえすきっかけとなる資料や発問を考えている。このことで、「分からない」気持ちから「分かりたい」が生まれ、「知りたい」「調べたい」という知的好奇心が生まれる。この知的好奇心が、課題追究や課題解決への切実な思いや意欲となり、第２次へとつながるポイントとなるのではないかと考える。

次に、単元の第２次（インデックスでいうと「問題を追究・解決する力を身につけよう」に対応）では、「分かりたい」「知りたい」という思いや意欲を、「なるほど」「よく分かった」という納得へといかにつなげていくのかが重要であると考える。その際に、学習問題に対する子どもたちの予想や仮説を踏まえて、問題を追究したり解決したりすることのできる手立てを考えておくようにする。たとえば、様々な資料を準備したり、見学やインタビューができるように準備をしたりするなど、子どもたちが見方・考え方を働かせながら、学習問題を追究したり解決したりできるような道筋（ストーリー）をイメージしながら授業を構想していく。そして、子どもたち一人ひとりの学習問題に対するまとめができるようにし、その過程で生じた疑問やさらなる問題意識を取り上げることで、第３次へとつながるポイントとなるのではないかと考える。

最後に、単元の第３次（インデックスでいうと「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけよう」に対応）では、「さらに考えてみたい」「わたしたちにできることはないだろうか」というような、第２次までで習得した見方・考え方を活用した発展的な学習となるようにする。もちろんこれらの学習は、教師側から提示したり問いかけたりする方法もあるが、これまでの学習を通して子どもたちから自然と疑問として出てくれば、より未来社会に向けたよりよい学習となるのではないかと考える。

3　単元計画

単元名　6年　世界のなかの日本とわたしたち～わたしたちのくらす広島とのつながり～（全11時間）

単元の目標　日本（広島県・広島市）とつながりの深い国はどのような国で、その国々の人々は、どのようなくらしをしているのかについて調べることを通して、日本と経済面や文化面、歴史面などでつながりの深い国々の人々のくらしについて理解できるようにするとともに、それぞれの国がお互いに尊重し合うことが重要であることを理解できるようにする。

時	活動内容	ポイント
	第１次（２時間）	
1	わたしたちのくらす広島県内の原爆ドームや宮島を訪れる外国人観光客の様子から、広島を訪れる観光客の国には、どのような国があるのか調べ、学習問題をつくる。**（１時間）**	1．資料から広島県・広島市を訪れる観光客は、どこの国から来ているのか読み取らせ、日本（広島県・広島市）とのつながりに気づかせる。 2．日本（広島県・広島市）とのつながりや国の特色、生活の様子などの調べたいことや、教科書やインターネットなどの調べ方、新聞などのまとめ方を確認する。
2	広島県や日本とつながりの深い国は、どのような国か、調べたいことや調べ方、まとめ方などについて考え合う。**（１時間）**	
	第２次（７時間）	
3・4・5	広島県や日本とつながりの深い国々として、アメリカ、中国、ブラジル、韓国からグループごとに１か国を選んで、調べ活動を行う。**（３時間）**	3．教科書やインターネット、地図帳などを使って、選んだ国についてグループごとに調べられるようにする。
6・7・8	グループごとに調べたことや分かったことについて、項目に沿ってタブレット端末などを活用しながら発表し合い、４か国について発表をもとにそれぞれまとめる。（日本とのつながり、学校生活、文化、考察など）**（３時間）**	4．日本と特に関係の深い４か国について、タブレット端末などのデジタル機器を活用しながら発表できるようにする。
9（本時）	広島県・広島市と姉妹・友好都市である「ハワイ州・ホノルル市（アメリカ）」や「四川省・重慶市（中国）」との国際交流について調べる。**（１時間）**	5．広島県・広島市とアメリカや中国との国際交流についてまとめ、互いに尊重し合いながら交流していることを理解できるようにする。
	第３次（２時間）	
10・11	世界の国々と日本（広島県・広島市）とのつながりや、日本（広島県・広島市）との国際交流など学習したことをもとに、これから未来へ向けた国際交流のあり方について考えたことや、自分たちにもできることについて話し合う。**（２時間）**	6．未来に向けたよりよい国際交流のあり方として、「世界の人々とともに生きていく」共生の気持ちをもつことや、よりよい国際関係を築くために、当事者意識をもつことができるようにする。

4　本時の指導案

本時の問い わたしたちのくらす広島は、姉妹・友好都市とどのような国際交流を行っているのだろうか。

本時のねらい 広島県・広島市とアメリカ（ハワイ州・ホノルル市）や、中国（四川省・重慶市）との国際交流について理解することを通して、広島県・広島市（日本）とそれぞれの地域（国）が互いに尊重し合いながら交流していることについて理解できる。

本時の展開（9 ／ 11 時間）

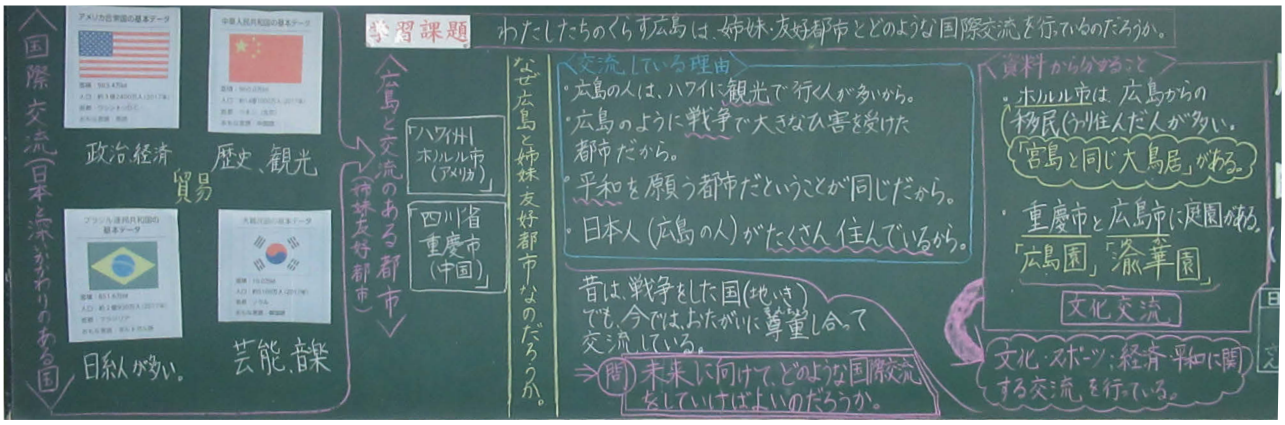
子どもの活動と発言	指導上の留意点
子 子どもの発言　配分時間	
1 日本と関わりの深い４か国のうち、広島県・広島市は、どの国と関係が深いのかを既有の学習や生活経験などをもとに発表し、その理由についても発表する。 10分	子どもの既有の生活経験や学習経験をもとに、日本と関係がある国々について考えられるように、日本を訪れる観光客の写真や、スーパーマーケットに置かれている輸入品などを提示する。
子 アメリカ（政治や経済で結びつきがあるから。） 子 中国（古くから交流があって、観光客が多いから。） 子 ブラジル（日系人が多く住んでいるから。） 子 韓国（韓国ドラマや音楽の人気が高いから。）	
わたし（たち）の問題　**わたしたちのくらす広島は、姉妹・友好都市とどのような国際交流を行っているのだろうか。**	
2 地図帳や地球儀を使って、「ハワイ州・ホノルル市（アメリカ）」や「四川省・重慶市（中国）」の位置を探し、その場所を把握する。 5分	地図帳や地球儀で調べたあと、全体で「Google Earth」を活用しながら、姉妹・友好都市の位置や様子を確認できるようにし、それぞれの場所の位置や周辺の様子をイメージできるようにする。
3 「ハワイ州・ホノルル市」や「四川省・重慶市」について、なぜ広島県・広島市と姉妹・友好都市なのか予想を出し合う。 10分	
子 広島の人は、ハワイに観光で行く人が多いから。 子 広島のように戦争で大きな被害を受けた都市で、特に平和を願う都市だということが同じだから。	
4 広島県・広島市と姉妹・友好都市である「ハワイ州・ホノルル市」や「四川省・重慶市」について資料をもとに、それぞれの都市とのつながりについて読み取る。 15分	・ホノルル市にある「宮島の大鳥居」や、重慶市にある「広島園」、広島市中央公園にある「渝華（ゆか）園」の写真を提示し、その様子から友好関係が読み取れるようにする。 ・広島市の安佐動物公園にも、友好関係の象徴としてレッサーパンダがいることを想起させたり、メディアでも紹介されることの多い上野動物園のパンダなども、中国との友好関係の象徴になっていたりすることを説明する。
＜資料＞「広島県の姉妹・友好都市についての資料」 子 ホノルル市は、日本からの移民のなかでも広島県からの移民が多く、広島県の象徴である「宮島の大鳥居」がホノルル市に設置されている。 子 重慶市と広島市のどちらにも庭園があり、庭園による文化交流が行われている。	
5 本時の学習を振り返り、わたし（たち）の問題に沿ったまとめを行い、話し合う。 5分	板書や資料を参考にさせながら、広島県・広島市と「姉妹・友好都市とのつながり」について、ノートにまとめる時間を設ける。 ※広島県・広島市（日本）とそれぞれの地域（国）が互いに尊重し合いながら交流していることについて理解できるようにする。【知識・技能】

5　授業後の考察

～第６学年「世界のなかの日本とわたしたち～わたしたちのくらす広島とのつながり～」について～

本単元では、「世界にはどのような国があり、どのようなくらしをしているのか」「わたしたちのくらす日本とのつながり」について学習できるようにした。世界について学ぶことの難しさは、やはり子どもたちの身近ではないという点である。子どもたちにとって興味をもちやすい学習にするためには、世界の国々と、子どもたちとのつながりを意識できるようにすることが重要となる。たとえば、子どもたちがくらすまちと世界の国々とのつながりを実感できるようにしたり、見たり聞いたりしたことのある子どもたちの経験をもとに、世界とのつながりについて理解を深めたりできるようにしていくことが重要である。その際に、子どもたちの経験や知識との関連によって、課題追究や課題解決への意欲をもたせることができ、本単元全体における学習問題の追究や解決に向けた意欲へとつなげていくようにした。

以下の板書は、全 11 時間のなかの第２次における最後の時間となる本時（９時間目）のものである。本時における授業のポイントとして、子どもたちの思考に沿って第３次へとつなげていくところである。広島とつながりの深い国（地域）が、日本との戦争によって大きな被害を受けているにも関わらず、現在では姉妹・友好都市として国際交流を行っていることから、これからの未来へ向けた国際交流のあり方を、子どもたち自身が当事者意識をもって考えていけるようにすることが重要となるのではないかと考える。



授業記録（終末部）の一部

教 教師の発問・指示・説明　子 子どもの発言

教 広島と姉妹・友好都市である「ホノルル市」や「重慶市」との国際交流について、みなさんはどう思いますか。

子 普通は、わたしたちもけんかしたら仲が悪くなるのと同じように、国同士で戦争をしたら仲が悪くなるのに、仲良しなのは不思議だと思います。

教 普通は、そう思いますね。過去に仲が悪くても友好関係を結ぶことのできたのは、きっと「平和を願う気持ち」が同じだったことが大きな理由だったかもしれませんね。

子 今、世界では戦争が起きているけど、わたしたちは、今の世界やこれから未来の世界で、どんな国際交流をしていけばよいのか考えておくことが大切だと思います。

教 これからの未来に生きていくみなさんが、このことを考えることがとても大切です。次の時間に考えていきましょう。

国家間の関係を、「もし自分ならばどのように思うのか。」と問いかけることで、国際交流について考えやすくする。

国同士の関係を、子ども自身の自分ごとに置き換えながら発言している。

「平和を願う気持ち」が、国家間の関係改善にもつながる、とても重要なことだということをおさえる。

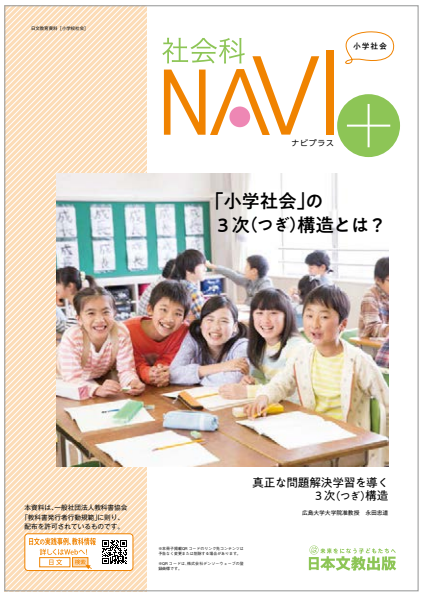
これから未来へ向けた国際交流のあり方を、子ども自身が考えること（「当事者意識」をもつこと）が大切だという気づきから、第３次につなげるようにする。

これまでの社会科 NAVI ＋問題解決学習特集

社会科 NAVI＋ ①

◀学習問題はどう設定する？／柴田好章先生（名古屋大学大学院教授）

一人ひとりの子どもの疑問を大切にした問題解決学習の基本を解説していただいています。学習問題づくりに悩んでいる先生方必見です。



社会科 NAVI＋ ②

▶「小学社会」の３次（つぎ）構造とは？／永田忠道先生（広島大学大学院准教授）

問題解決学習を確実に実現するための手立てとして、『小学社会』の３次構造をご提案いただいています。

社会科 NAVI＋ ⑤

◀続・「小学社会」の３次（つぎ）構造とは？／永田忠道先生（広島大学大学院准教授）

３次構造とは何であるかをさらに詳しく説明し、社会科で身につけたい力について具体的に言及いただいています。

社会科 NAVI＋ ⑦

▶「社会的な見方・考え方」を育む問題解決学習／柴田好章先生（名古屋大学大学院教授）

社会的な見方・考え方とは何か。問題解決学習を実践することでそれが育まれる様子を解説いただいています。

社会科 NAVI ＋シリーズは、
右の二次元コードからお読みいただけます。
▶▶▶

社会科 NAVI ＋　小学社会⑩

日文教育資料［小学校社会］

令和５年（2023 年）４月 28 日発行

編集・発行人　佐々木秀樹

発行所　日本文教出版株式会社
〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33657

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171

東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618

九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938

東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690